

傷逝——涓生の手記

魯迅 著

中島長文 訳

この訳文「傷逝」は『颯風』第六十一号に載せた拙文「シェリーの肖像——「傷逝」論」のために訳したものであるが、紙幅の都合でここに移した。拙論とともに読んでいただければ幸いである。

もしできるなら、わたしの悔恨と悲しみを書き留めたい、子君のために、自分のために。

会館のなかの片隅に忘れられたぼろ部屋はこんなにも静寂そして空虚である。時の過ぎるのはまことに早い。わたしが子君を愛し、彼女と共にこの静寂と空虚を逃げ出して、もうまる一年になる。とてもまずいことに、わたしが又やってきた時、あいにく空いているのはこの部屋だけだった。依然としてこの破れ窓、この窓の外に半ば枯れた槐の木と老いた藤蔓、この窓ぎわのテーブル、この荒れた壁、この壁際のベッドである。深夜ひとりベッドに横になっていると、あたかもわたしが子君と同居する前と同じように、過ぎた一年の時間が全部消し去られ、まったくなくなつたかのようで、わたしは

決してこのぼろ部屋から引越さず、吉兆胡同に希望に満ちた小さな家庭を持つたこともなかつたかのようだ。

そればかりではない。一年前には、この静寂と空虚は決して今のようにではなく、いつも期待をはらんでいた。子君が来ることへの期待を。久しい焦燥のうちに、革靴の踵が石畳の道に触れる響きを聞くや、どんなににわかになつたかを生き生きさせたことか。そしてえくぼを帯びた白い丸顔、白い痩せた腕、縞模様の木綿のブラウス、黒いスカートが目に入った。彼女は又窓の外の半ば枯れた槐の若葉を持つてきた。わたしに見せようとしたものには、まだ鉄のような幹に垂れ下がつた一房一房の薄紫の藤の花のときもあつた。

しかし今は、ただ静寂と空虚は相変わらなかつたが、子君はも

う決して来ることはない、しかも永遠に、永遠にだ！……

子君がわたしのこのぼろ部屋にいない時には、わたしは何も目に入らなかった。まったくの手持ち無沙汰の中で、一冊いい加減につかむ、科学のでも、文学のでも、どのみちなんでも同じことであつた、読んで、読んで、ふと気がつくこと、もう十何ページも捲つているのだが、本に書いてあることをまったく覚えていない。ただ耳だけがことのほか鋭敏になつて、まるで表門の外の往来のあらゆる足音、その中に子君のがあつて、しかもコツコツと次第に近づいてくるのを聞きつけたかのようなだつた、——しかし、しばしば又次第に遠のいて行つて、ついには別の足音の雑踏の中に消えていった。わたしは子君の靴音に似ない布底の靴を履いた長班の息子を憎み、子君の靴音にそっくりのいつも新しい革靴を履いた隣、クリームを擦りこんだガキを憎んだ！

彼女は人力車がひっくり返つたのではないだろうか。電車に轢かれたのではないだろうか……

帽子をつかんで彼女に会いに行こうとした、けれども彼女の叔父にはかつて面と向かつて罵られたことがあるのだ。

突如、彼女の靴音が近づいてきた、歩一步と響かせながら、迎えに出た時には、もう藤棚の下を過ぎて、顔には微笑のえくぼを浮かべて。彼女は叔父の家では多分まだいじめられてはいないのだろう。わたしはほっとして、暫し黙つて見つめあつたのち、ぼろ部屋にはしだいにわたしの話し声が満ちていつ

た。家庭専制を語り、古い慣習の打破を語り、男女平等を語り、イブセンを語り、タゴールを語り、シェリーを語る……。

彼女はいつも微笑んで頷き、両眼には稚氣と好奇の輝きが満ちていた。壁には一枚銅版のシェリーの半身像がピンで止めてあつた。雑誌の中から切り取ってきたもので、彼の最も美しい肖像であつた。わたしが指差して彼女に見せた時、彼女はただチラッと見ただけで俯いてしまった、どうも恥ずかしかつていようだつた。そういうところは、子君はまだ古い思想の束縛を脱しきれていないようだ、——後で考えたのだが、シェリーが海で溺れ死んだ記念の像があるいはイブセンのと取り替えた方がよいのではと、だが結局は替えずじまいで、いまではその一枚さえどこへ行つたのかわからない。

“わたしはわたし自身のものだけ、誰もわたしに干渉する権利などありゃしない！”

これはわたしたちが交際して半年ほど経つたころ、またこちらにいる叔父と家にいる父のことを話題にした時、しばらく黙つていた後で、はつきりと、断乎として、落ち着いていった言葉である。その時はわたしがすでにわたしの意見、わたしの身の上、わたしの欠点を、なんの隠し立てもなく述べ尽くしていたから、彼女も完全に理解していた。この言葉はわたしの魂を震えさせ、その後何日も耳の中で鳴り響き、そして言い表せない狂わんばかりの喜びとともに、中国の女性が、決して厭世家の言うような手の施しようのないものではなく、遠

くない将来、ひかり輝く曙の色を見るだろうことを知った。彼女が門を出るのを、いつものように十歩ばかり離れて送った。いつものようになまず髭の老ぼれの顔が汚い窓ガラスにぴたりくっつき、鼻先までぺちゃんこになっていた。外庭に出ると、いつものように又もピカピカのガラス窓のなかのガキの顔には、クリームが厚さを増していた。彼女はわき目も振らず堂々と歩き、目もくれなかった。わたしも堂々と戻った。『わたしはわたし自身のものだわ、誰もわたしに干渉する権利などありやしない！』この徹底した考えは彼女の頭では、わたしよりもっと透徹して、ずっと強かった。半瓶のクリームとぺちゃんこの鼻先など、彼女にとって何であつたらう。

その時どのようなにしてわたしの純心で熱烈な愛を彼女に告白したのかもうはつきり覚えていない。まして今どころか、その直後でさえすでに朦朧としていて、夜に回想しても、とつくとわずかな断片しか残っていない。同居してから一二ヶ月には、そうした断片も追跡しようのない夢幻しと化してしまった。ただ覚えているのはその前の十何日か、ねんごろに告白の態度、言葉の前後の配列、およびもしも断られた場合の居住まいを研究したことだけだ。しかしその時になつてみると全て無用のようであつた。緊張の中で、体が勝手に映画の中で見たことのある方法をとっていた。後になつて考えると、とても恥ずかしいが、記憶の上ではただその点だけ

がいつまでも残っていて、今でもまだ暗い部屋の孤灯のように、涙を浮かべて彼女の手を握り、片膝をついたわたしの姿を照らしている……。

わたし自身だけでなく、子君の挙止言動でさえ、その時ははつきり見えていなかった。ただ彼女がすでにわたしを受け容れていることだけはわかつた。だがまた確か彼女の顔色が青白くなり、ついでまた次第に真つ赤に——見たこともない、またもう見ることもない真つ赤になつた。子どものような目には悲喜の色が輝いていたが、訝しげな光を交えつつ、努めてわたしの視線を避けていたけれども、とまどいながら窓を破つて飛び出しそうであつた。しかしながらわたしは彼女がすでにわたしを受け容れたことは分かつていたが、彼女がどう言つたのかあるいは言わなかつたのか分からなかつた。

だが彼女はなんでも覚えていた。わたしの言葉は、まるで読み慣れたように、滔々と暗誦できた。わたしの挙動は、わたしには見えない映画のフィルムが目許に掛かっているかのように、生き生きと、微に入り細をうがって述べられた、もちろんもう考えたくもないあの浅薄な映画の一瞬も。夜が更けて人が寝静まると、向かい合つて復習をする時間だ。わたしはいつも質され、試験され、そして当時の言葉を復誦するよう命ぜられる、しかしながらいつもまるで劣等生のように、彼女に補足され、彼女に糾正されねばならなかつた。

この復習は後にはやはり次第に稀になつた。だがわたしは彼女の両眼が空中を注視して、放心したように想いをめぐら

しながら、表情が次第に柔和になり、えくぼも深くなつてゆくを見るだけで、彼女が又旧い科目を自修しているのが分かった。ただわたしは彼女がわたしのあのおかしな映画の一瞬间を見ることを恐れた。だがわたしは又知っていた、彼女は必ず見るだろうことを、そして見ずにはおかないことを。

だが彼女は決しておかしいとは思わなかった。たといわたし自身がおかしいと思つても、恥ずべきだと思つても、彼女は少しもおかしいと思わなかった。この事をわたしははつきりと知っていた。彼女はわたしを愛していたからである、それほど熱烈に、それほど純粹に。

去年の暮春は最も幸せであつたし、また最も慌ただしい時であつた。わたしは落ち着いてきたが、又心のちがう部分が体と一緒に慌ただしくなつた。わたしたちはこの時になつてようやく道を二人で歩き、公園にも何度か行つたが、最も多くは宿探しであつた。わたしは路上でしばしば探るような、薄ら笑いの、猥褻なそして蔑みの眼ざしに出会い、ともすると、全身が縮むように感じると、すぐにも自分の誇りと反抗の気を奮い起こして持ち堪えねばならなかつた。だが彼女はなんの恐れもなく、そういうことにはままったく関心を示さず、ただ静かに悠々と前進し、坦然とまるで無人の境を行くが如しであつた。

宿探しは実に容易な事ではなく、たいていは何かを口実に断られ、幾つかはわたしたちが適當でないと思つた。最初わたしたちの選択の基準はとてきつかつた——きつつくもな

かつたのだが、というのは見にゆくと大抵がわたしたちが心安らかに身を置く場所ではないように思われたからである。後からは、向こうが受け容れてくれるのを探すしかなかつた。二十箇所あまりを見て、ようやくこれならなんとかしばらくはやつて行けそうな場所を見つけた。吉兆胡同の小さな家の二間間口の南側の建物であつた。主人は小官吏だつたが、ものに分かつた人で、自分たちは主屋と脇棟に住んでいた。夫人とまだ一つにもならぬ女の子しかおらず、田舎出の女中を一人雇つていて、子どもが泣きさえしなければ、極めて落ち着いた閑静なところであつた。

わたしたちの家具はとても簡単だつたが、すでにわたしが貯めたお金の大半を使つてしまひ、子君は彼女の唯一の金の指輪と耳飾りを買つてしまつた。わたしは止めたのだが、どうしても売ると言い、わたしもそれ以上がんばらなかつた。彼女にも一口株を持つてもらわねば、気持ちよく住めないだろうことは分かつていた。

彼女の叔父とは、すでに早く喧嘩別れして、もう彼女を姪とは認めないというところまで腹を立てさせていた。わたしも次々と何人か自分では忠告しているつもりだが、実際はわたしに気後れしたり、あるいは結局嫉妬した友人と絶交した。しかしながらこれで却つてさつぱりした。毎日仕事が終わると、もう黄昏近かつたし、車夫も又決まつて走るのが鈍かつたけれども、結局はまだ二人が向かい合う時間はあつた。わたしたちはまず黙つて見つめ合い、それから心を割つ

た親密な会話をし、それから又黙り込んだ。みな俯いて沈思していたが、別になにかを考えていたわけではない。わたしも次第にはつきりと彼女の体、彼女の魂を読み込んでいった。三週間も経たず、わたしは彼女についてすでもっとよく理解したようだ。以前は理解したと思っていた多くが今から見ると却って隔たり、つまりいわゆる真の隔たりであることがはつきりしてきた。

子君は日を追って活発になってきた。だが彼女は花が好きではなかった。わたしが縁日で買った二鉢の草花は、四日も水をやらなかったで、壁の隅で枯れてしまった。わたしも又世話する暇がまったくなかった。しかし彼女は動物が好きだった。たぶん官吏の奥さんのところから伝染したのだろう、一月もしないのに、わたしたちの眷属は俄に多くなつた。四匹のコーチンのひよこが、小さな中庭を家主の十匹余りと一緒に走っていた。だが彼女たちはコーチンの顔がわかるらしく、それぞれどいつが自分ちのか知っていた。さらにもう一匹斑のちんころがいた。縁日で買ってきて、たしかもともと名前があつたようだが、子君は別のをつけてやり、阿随と呼んだ。わたしはそれで阿随と呼んだが、この名前が嫌いであつた。これは本当である、愛情は時々更新し、成長し、創造しなければならぬ。わたしは子君にそのことを言うと、彼女も分かつたように頷いた。

ああ、それはどんなに穏やかで幸福な夜であつたらう！

安寧と幸福は凝固するものである。いつまでも凝固したままの安寧と幸福である。わたしたちが会館にいた時には、まだ時々議論の衝突と意味の誤解があつたが、吉兆胡同に来てからは、それさえもなくなつた。わたしたちはただ灯下で対座しての懐旧談の中で、あの頃の衝突の後の和解の、蘇りのような楽しさを反芻するだけであつた。

子君は太つてきて、血色もよくなつてきた、残念なのは忙しいことだつた。家事のつとめで世間話をする暇さえなく、まして読書や散歩はなおさらである。わたしたちはよく言つた、どうしてもひとり女中を雇わねばと。

これでわたしも同じように不機嫌になつた。夕方帰つてくると、よく彼女が不愉快な顔色を包み隠しているのを見た。とりわけわたしが不快になつたのは彼女が無理に笑顔で取り繕おうとしていることだつた。幸い聞き出してみると、やっぱり小官吏の奥さんとの暗闘であつた、導火線は両家のコーチンのひよこであつた。だが又なんでもわたしに隠しておくことがあろうか。人間はどうしても一つの独立した家を持たねばならない。こんな所は、住めたものではない。

わたしの道は決まりきつてゐる。週の六日は、家から局へ、又局から家へである。局では事務机に坐つて公文と手紙を書き写し、書き写し、書き写す。家では彼女と向き合うかあるいは彼女が焜炉をおこし、ご飯を炊き、饅頭を蒸すの手伝う。わたしが飯炊を覚えたのは、この時である。

だがわたしの食べ物は、会館にいた時よりずっと良くなつ

た。料理は子君の得意ではなかったけれども、彼女はここでも全力を傾注していた。彼女の日ごろの気遣いには、甘苦を共にするということで、わたしも一緒に気遣いせざるを得なかった。ましてや彼女は又こんな終日顔中を汗だらけにし、短髪はみな額に粘り付き、両の手も又こんなに荒れてきているのだから。

ましてさらに阿随を飼い、コーチンを飼うのだから、……いずれも彼女でなくては叶わぬ仕事である。

わたしはかつて忠告した。わたしは食べないのは、構わない。だけど決してそのように齷齪してはいけないと。彼女はわたしをチラと見ただけで、口をきかなかったが、顔色はどうもいくらか悲しそうだった。わたしも黙るしかなかった。しかし彼女はやっぱり変わらず齷齪したのだった。

わたしが予期した打撃は果たしてやってきた。双十節の前晩、わたしはつくねんと坐っていて、彼女は腕を洗っていた。扉を叩く音がしたので、わたしが開けにゆくと、局の使いで、わたしに一枚のガリ版刷りの紙切れを渡した。わたしにはいくらか思い当たる節があった、灯下に行つて見ると、果たせるかな、印刷してあるのは、つまりこうである。

「局長の論を奉じて、史涓生には局に到りて辦事するを庸うるにおよばざら着む

秘書処啓 十月九日」

これは会館にいた時に、わたしはとつくに思料していた。

あのクリームは局長の息子の博打友だちで、きつとデマを撒き散らして、なんとかして言いつけるだろうと。今になってやっと効果が生じたのは、それだけでとても遅いということになるだろう。しかしこれはわたしには打撃ということにはならない、なぜならわたしはとつくに人のために筆耕しても、あるいは家庭教師をしてもよい、あるいは苦勞だけれども少しは翻訳もできると、心に決めていたからだ。まして『自由の友』の編集長は何度か会つたことのある知り合いである、二月前にも通信したことがある。だがわたしの心はドキドキしていた。あの畏れることのない子君でさえ顔色を変えたのだ。それが特にわたしの心を痛めた。彼女はこの頃少し物怖じするようになったようだ。

「それがどうしたつていうんです。ねえ、わたしたち新しいことをやりましたよ。わたしたち……。」と彼女は言った。

彼女は言い切つたわけではないが、なぜだか知らないが、その声はわたしにはただうわずつて聞こえるばかりだった。灯の光もとわりわけ仄暗く思われた。人間とは本当におかしな動物だ。ごく些細なちよつとした事柄でも、とても深い影響を受けるのだ。わたしたちはまず黙つて見つめ合つたが、段々と相談して、お終いには今あるお金をできるだけ節約して、一方「三行広告」を載せて筆耕か家庭教師の職を求め、一方では『自由の友』の編集長に手紙を書いて、目下の境遇を説明し、彼にわたしの訳本を採用してもらい、この苦しい時の手助けをしてくれるよう頼むことに決めた。

“やると言ったら、やるぞ！ 新しい道を開こう！”

わたしはすぐに向きを変えて机に向かい、香油の入った瓶と酔の小皿を押しやり、子君はあの仄暗い燈を持つてきた。わたしはまず広告を起稿し、その次は訳すべき本の選定だが、引越し以来開いて読んだことがないので、どの本にも塵がいつばい積もっていた。最後にようやく手紙を書いた。

とても躊躇した、どういうふう書いて良いか分からず、筆を止めて考えた時、ちらりと目を彼女の顔に転ずると、薄暗い灯火のもので、またとても悲しそうに見えた。わたしはほんとうに思いもなかった、こんな些細なちよつとした事柄が、断乎として、畏れない子君にこんな顕著な変化を起こそうとは。彼女は近ごろとても物怖じするようになったが、別に今夜から始まったことではない。わたしの心はこれによつていつそう乱れた。ふと安らかな生活の影——会館のぼろ部屋の静寂が、眼前に閃き、目を凝らそうとしたが、又薄暗い灯火が目に入った。

長いことかかって、手紙も書き終えた、頗る長い手紙であつた。とても疲れを覚え、どうも近ごろは自分も少し気後れするようになったのではないか。そこでわたしたちは、広告と投函は、明日一緒にやることに決めた。ともに期せずして腰を伸ばして、無言のうちに、又互いの堅忍不拔の精神を感じ、また新たに芽生えた将来の希望を見たようだった。

外からの打撃は実はわたしたちの新たな元気を奮い起こし

た。局での生活は、もともと鳥売りの手の中の鳥のようなもので、わずかに危うい命をつなぐだけのほんの少しの小米があるばかりで、決して太らない。いったん日が長びくと、翅が麻痺してしまうしかなく、たとい籠から放たれても、もう飛ぶことができない。今では結局この籠から脱出したということになる。わたしはここから新たな広々とした天空を飛翔しよう、まだわたしが自分の羽撃きを忘れてしまわぬうちに。

三行広告は一時に無論効果が出るものではない。だが翻訳も容易な事ではない、以前読んだことがあり、もう分かっていると思っていたことが、ひとたび始めてみると、疑問百出で、なかなか進まない。しかしわたしは努力してやろうと決めた。一冊の半ば新しかった字引が、半月も経たぬ間に、縁に大きな真つ黒い手垢がついた。これはわたしの仕事の真剣さを証明している。『自由の友』の編集長はかつて言ったことがある。彼の刊行物は決して良い原稿を没にしない。

残念なのはわたしに静かな部屋がないことだった。子君もまた以前のような物静かな、気遣いの良さがなくなり、部屋にはいつも碗皿が散乱し、煤煙が漂い、落ちて着いて仕事ができなかった。しかしこれはむろんわたし自身が一間の書齋を持つ力がないのを恨むしかなかった。しかしそれに阿随が加わり、コーチンたちが加わった。それにコーチンたちが大きくなると、さらにたやすく両家の争いの導火線になった。

それに毎日の“川の流れのように止まぬ”食事である。子

君の功績は、まるで完全にこの食事の中に打ち立てられるか
のようであつた。工面した金で食い、飯を食うために工面を
する、それに阿随に食わせ、コーチンを飼わねばならない。
彼女は以前知つていたことを全部忘れてしまい、わたしの思
考がしよつちゆうこの食事の催促で断ち切られることにも氣
が付かないようであつた。たとい食事中心いさか腹立ちの氣
を見せたとしても、彼女は全然変えようとはせず、相変わらず
何も感じないようにむしやむしややりだすのだつた。

わたしの仕事が決まりきつた食事の束縛を受ける事ができな
いことを彼女に分からせるのに、五週間かかつた。彼女は分
かつた後も、たぶんあまり愉快でなかつたのだろうが、何も言
わなかつた。わたしの仕事は果たしてそれ以後比較的早く進
み、間も無く全部で五万言を訳し、あと一度見直ししさえすれ
ば、書き上げた二篇の小品とともに、いつしよに『自由の友』
に送ることができる。ただ食事が依然としてわたしを悩ませ
た。料理の冷えたのは、構わない、しかし足りないのだ。時
にはご飯さえ足りなかつた。わたしは終日家にいて頭を使う
ので、ご飯の量は以前に比べてずっと減つていた。これはま
ず阿随にやつているからで、時には近ごろでは自分たちでさ
えなかなか食べられない羊肉まである。阿随は實際可哀想な
ほど痩せているので、家主の奥さんまでそのためわたしたち
を物笑いにする、彼女はこんな侮りは受けられないと言う。
そこでわたしの残飯を食べるのはコーチンたちしかいな
い。これはわたしがずいぶん経つて見出したことである、だ

が同時にまたハックスレーの論定「人類の宇宙間における位
置」のように、わたしのここにおける位置は、ちんころと
コーチンの間にすぎないことを自覚した。

それから、何度かの諍いと督促を経て、コーチンたちも
段々どご馳走と変わり、わたしたちと阿随はともに十何日か
の美味を享受した。しかし実は皆とても痩せていた。とい
うのは彼らはとつくに毎日数粒の高梁しかもらえなくなつてい
たからだ。それからはずつと静かになつた。ただ子君だけは
とても落ち込んで、いつも惨めさと無聊を覚えているよう
で、あまり口をきこうともしなくなつた。わたしは思った、
人はなんと容易く変わるものかと。

しかし阿随も置いておけなくなつた。わたしたちはすでに
どこから手紙が来るなどと望めなくなつていた。子君にも
阿随にお手をさせたりちんちんさせたりするわずかな食べ物
もなかつた。それに冬が近づくのは早く、暖炉がすぐに大き
な問題になる。彼の食料が、わたしたちには実は早くから極
めて見やすいとても重い負担であつた。そこで彼も置いてお
けなくなつた。

もし藁しべをさして縁日の市に行つて売り出せば、何文か
のお金になつたかもしれない。しかしわたしたちにはできな
かつたし、そうしたくもなかつた。結局風呂敷で頭を包み、
わたしが西郊に持つていつて捨てた、それでも追いついてこ
ようとするので、それほど深くはない穴に突き落とされた。

住まいに戻ると、さらにずっと静かになったのが感じられた。だが子君の痛ましい表情に、わたしはびっくりした。それは見たことのない表情で、むろん阿随のためである。しかしまたどうしてそこまで？ わたしはまだ穴に突き落とした事は言っていないのだ。

夜になると、彼女の痛ましい表情に、氷のような分子が加わった。

“おかしいな。——子君、君はどうして今日はこうなんだ？” わたしは堪えきれずに尋ねた。

“なに？” 彼女はわたしを見ようとしなかった。

“君の顔色……”

“なんでもないのよ、——ほんとになんでもないわよ。”

わたしは終に彼女の言動から、彼女はおそらくわたしが無慈悲な人間だと見たのだろう。しかし、わたし一人なら、生活するのは容易だ、矜持が高いせいで、いままで先代からの旧知とは行き来してないし、引越後以後は、またあらゆる旧知の人とも疎遠になったけれども、遠くへ行くことができさえすれば、生きる道はまだとても広い。今この生活の圧迫の苦痛を耐えているのも、大半は彼女のためである。阿随を捨てたくらいで、何もこうまでならなくとも。だが子君の識見はただ浅薄になっていくばかりのようで、ついにこんなことさえ気がつかないようになるとは。

わたしは機会を見て、暗にこうした道理を彼女にほめかけた。彼女はわかつたように頷いた。けれども彼女の後から

の様子を見ると、彼女は分かっているが、あるいは決して信じてはいなかった。

天気 of 冷たさと表情の冷たさに迫られて、わたしは家の中に身の置き所もなかった。しかしどこへ行くか。大通りや、公園には、氷のような表情はなかったけれども、寒風は結局人の肌を裂かんばかりに刺した。わたしは終に通俗図書館にわたしの天国を見つけた。

そこは入場券を買う必要がなかった。閲覧室には又鉄の暖炉が二つしつらえてあった。たとい燃えているのかわからないかわからない石炭の暖炉でも、それがしつらえてあるのを見ただけで、精神的にはどうしても少しは暖かい。本は読むべきものがない、古いのは陳腐だし、新しいのはほとんどなかった。

幸いわたしがそこへ行くのも本を読むためではなかった。他にはいつも何人かいて、多くて十余人、皆単の着物で、ちやうどわたしのように、各人が各人の本を読んでいた、暖を取ることに口実として。これはわたしに殊に似合っていた。道ではよく識った人に会いやすく、軽蔑の眼差しを受けるが、ここでは決してそのような不慮の災難はない。なぜなら彼らは永遠に別の鉄の暖炉を囲んでいるか、あるいは自分の焔炉の炉端にいるからである。

そこにはわたしに読ませる本はなかったけれども、わたしの考えを容れる落ち着きがあった。ひとりぽつねんと坐って、これまでを回想するようになって、はじめてここ半年余りは、ひたすら愛——盲目的な愛——のために、人生の別の要

義を全部疎かにしていたことに気づいた。第一は、すなわち生活である。人は生活してなければならぬ、それでこそ愛は依附するところができるのだ。世界には決して奮闘する者のために開けない活路などない。わたしもまだ翼の羽撃きを忘れてはいない、以前に比べればもうずっと落ち込んではいりけれども……。

部屋と読者は次第に消え去り、わたしは怒涛の中の漁夫、塹壕の兵士、自動車の中の貴人、租界の投機家、深山密林の豪傑、教壇の上の教授、闇夜の運動者と深夜の泥棒……を見た。子君は、――そばにはいなかった。彼女の勇気は皆なくなつてしまい、ただ阿随のために悲憤し、食事のために精を出した。しかし不思議なことに決してなぜか痩せ衰えてはいなかった……。

寒くなつて、暖炉の燃えているのかいないのかわからぬ石炭も、終には燃え尽きて、もう閉館の時間である。又吉兆胡同に戻り、氷のような表情を味わねばならない。近ごろはたまに暖かい態度にあうこともあるが、これは却つてわたしの苦痛を増した。確かある晩、子君の目にふと久しく見なくなつた稚氣の光が又差し、笑いながらわたしとまだ会館にいた頃の様子を話したが、時々またその面持ちに恐怖の影がよぎることがあつた。わたしは自分の冷たさがこのごろ彼女のそれを超えており、すでに彼女の疑惑を引き起こしていることを知り、ただ努めて談笑し、彼女にいささかの慰めを与えようとした。しかしわたしの笑顔が顔に出、わたしの言葉が

口にでるや、たちまち空虚に変わり、この空虚が又たちまち反響を呼び、わたしの耳目に戻り、わたしに耐え難くあくどい冷嘲を浴びせる。

子君も感じているようだった、それからは彼女のいつもの麻痺したような落ち着きを失つて、極力隠してはいたけれども、どうも時々疑惑の表情が現れた。だがわたしに対してはずっと穏やかになつた。

わたしは彼女にはつきり告げなければならない、だがまだ勇気がなかつた、言おうと決心した時には、彼女の子どものような目の色を見ると、しばらく無理にも喜んだ顔をするしかなかった。しかしこれも又たちまちわたしに冷嘲を浴びせ、わたしにあの冷たい落ち着きを失わせるのであつた。

彼女はその時から又往事の温習と新しいテストを始め、わたしに多くの虚偽のいたわりの答案を出させて、いたわりを彼女に告白し、虚偽の草稿を自分の心に書くことになつた。わたしの心は次第にこうした草稿でいっぱいになり、いつも呼吸も叶わぬほどであつた。わたしは苦悩の中でよく思つた、真実を言うにはむろん極めて大きな勇気がある。もしその勇気がなく、虚偽に安閑としていけるなら、それはやはり生きるための新たな道を拓くことのできない人間である。そうではないばかりか、そんなことならそもそもこの人間というものも今まで存在したためしはなからう！

子君には恨めしげな表情があつた。朝、とても寒い朝で、

それは見たことがないものだった、だがわたしには恨めしげに見えたのかもしれない。わたしはその時冷ややかに怒りかつひそかに笑った。彼女のよく練られた思想と闊達な恐れのない言論は、結局はやはり空虚でしかなかった、そしてこの空虚に対しては決して自覚していないのだ。彼女はとつくだんな本も読まなくなっていたし、もうわかっていたいなかった。人間の生活の第一は生きようとすることであり、この生きようとする道に向かうには、必ず手を携えて共にゆくか、あるいは奮い立って一人行かしなければならぬ、もし誰かの着物にしがみつくことしか知らないのでは、戦士といえども戦いにくく、共に滅ぶしかないということ。

わたしは新しい希望はわたしたちの別れにしかないと思つた。彼女は決然とこの状態を捨て去るべきなのだ、——わたしはふと彼女の死を思つたが、直ちに自責し、懺悔した。幸い朝で、時間はたつぷりあり、わたしは自分の真実を言うことができる。わたしたちの新しい道の開拓は、この時にある。わたしは彼女と閑談し、わざとわたしたちの往事を引き、文芸を持ち出し、それから外国の文人、文人の作品、『ノラ』『海の夫人』に及んだ。ノラの果敢さ……を称揚した。またやはり去年会館のボロ部屋で語つたことなども、だが今ではすでに空虚に変わり、わたしの口から自分の耳に入ると、いつも姿を隠した悪ガキが、背後で悪意に満ちて辛辣に口真似をしているのではないかと疑つた。

彼女は頷きながら応答して聞いていたが、そのあとは黙つ

てしまった。わたしも途切れ途切れに自分の話をし終わったが、余韻さえ全て空虚に消えさつてしまった。

“そうね。”彼女は又しばらく沈黙して、言った。“でも、……消生、わたしあなた近頃変わつてしまつたと思うの。じゃない？ あなた、——本当のこと言つてよ。”

わたしは真つ向から一撃を喰らつたように思つた、だがやはり直ちに気を鎮めて、わたしの意見と主張を述べた。新しい道の開拓は、新しい生活の再建は、共に滅びることを避けるためなのだ。

最後に、十分な決心をして、次の言葉を加えた。“……まして君はもうなんの顧慮もなく、勇往邁進できるのだよ。君は本当のことを言えと言つたね、そうだ、人間は虚偽であつてはならない。ぼくは本当のことを言おう。なぜつて、ぼくはもう君を愛していないのだよ。でもこれは君にとつては随分よいことだ、なぜつて君はもつと後腐れなくやれるからだ……。”

わたしは同時に大きな変事が来ることを予期した、しかし沈黙しかなかった。彼女の顔色は突如灰色に変わり、死んだようになつた、かと思ふと瞬時に又甦り、目も稚氣を帯びてキラキラした光を放つた。この眼光は四方に向かい、ちようど子どもが飢え渇えの中で慈愛に満ちた母を求めるように、ただ空中を彷徨うばかりで、怖がつてわたしの目を避けた。わたしは見えていられなくなった、幸い朝で、寒風を冒して通俗図書館に急いだ。

そこで『自由の友』を見ると、わたしの小品文がみな載つ

ていた。これはわたしを驚かせ、少し生気を得たようだった。わたしは思った、生活の道はまだ多い、——しかし、今のようではやはりダメだ。

わたしは久しく行き来のなかった知人を尋ね始めた。だがそれも一度か二度にすぎない。彼らの部屋は当然暖かかったが、わたしは骨の髄まで寒さを感じた。夜間は、氷よりも冷たい部屋に縮こまった。

氷の針がわたしの魂を突き刺し、いつまでもしびれる疼痛に苦しんだ。生活の道はまだ多い、わたしもまだ翼の羽撃きを忘れてはいない、と思った。——わたしはふと彼女の死を思った、しかし直ちに自責し、懺悔した。

通俗図書館でしばしば光明の閃きを瞥見した。生きるための新たな道が前に横たわっていた。彼女は勇敢に覚悟を決め、毅然としてこの氷の家を出て、そして、——少しの恨みもない表情であった。わたしは行く雲のように軽々と、空の果てを漂った、上には真つ青な空、下は深山大海、大廈高樓、戦場、自動車、租界、公館、明るい市場、暗い夜……。

そして、ほんとうに、わたしはこの新生面が開かれんとすることを予感した。

わたしたちはなんとか極めて忍び難い冬、この北京の冬を過ごした。まるでトンボがいたずらな悪ガキの手に落ちたように、細い糸に繋がれ、散々弄ばれ、虐待され、幸い生命は落とさなかったものの、結果はやはり地上に横たわったま

ま、早いか遅いかの時間を争うしかないのだ。

『自由の友』の編集長にはすでに三通も手紙を書いて、ようやく返事が来た。封筒には二枚の図書券、二角と三角のしかなかった。催促するだけで九分の切手を使ったのだ、それに又なんの得る所もない空虚のためにむぎむぎと一日の飢餓に苦しんだのであった。

しかし来るであろうと思った事が、終にやつて来た。

それは冬と春のさかいのことで、風はすでにそんなに冷たくはなく、わたしはもつと長く外をうろついた。家に帰るのは、大概すでに暗くなっていた。そうした暗いある晩に、わたしがいつものように打ち萎れて帰ってきて、住居の門を見ると、いつものようにいつそう気が減入って、足がもつと緩くなった。だが終には自分の部屋に入った、が灯がついていない。マツチを擦ってみると、異様な寂寞と空虚だ！

驚いている最中、官吏の奥さんが窓の外にやってきてわたしを呼び出した。

『今日子君のお父さんが来られて、彼女を連れて行かれました。』彼女は簡単に言った。

これはまた考えもしなかった事で、わたしは頭の後ろに一撃を喰らったようで、無言で立っていた。

『行つたのですか？』しばらくして、わたしはそう訊いた。

『行かれました。』

『彼女は、——何か言ってきましたか？』

“なにも。ただあなたが帰って見えたら、行つたと言つて
くださいと。”

わたしは信じられなかった。しかし部屋は異様な寂寞と空虚である。方々子君を探してみたが、ただいくつかのぼろく薄暗い家具が、いずれも極めてさっぱりと見え、それらが人ひとり物一つ隠す力が少しもないことを証明していた。わたしは考えを変えて手紙かあるいは彼女の残していつた書き付けを探したが、それもなかった。ただ塩と干した唐辛子、メリケン粉、白菜が半株、一と所に集められ、そばにまだ何十枚かの銅貨があつた。これがわたしたち二人の生活資料の全てであつた。今彼女は鄭重にそれをわたし一人のために残してくれた、無言のうちに、わたしにそれでできるだけ長く生活を維持するようにと。

わたしは周囲に押しつぶされそうな気がして、中庭に走り出た。暗闇がわたしを包んだ。母家の障子窓には明るい灯火が映り、彼らはちようど子どもをあやして笑つていた。わたしの心も落ち着いてきて、重苦しい圧迫の中に、だんだんと臚げに抜け出す道が現れてきたように思った。深山大沢、租界、電灯の下の宴会、塹壕、最も黒く最も黒い深夜、利刃の一撃、まるで響かない音……。

少し軽くなつて、ほぐれた心地がし、旅費のことを考え、そしてふううと一息ついた。

横になつて、つむつた目の前を予想する自分の前途が過ぎ

てゆき、真夜中にならぬうちにすでに尽きてしまつた。暗中にふと一山の食べ物を見たようだが、その後、子君の血の気のない顔が浮かび、子どものような目を見張り、なにか頼むようにわたしを見ていた。目を凝らしたが、何もなかつた。

だがわたしの心は又も重くなるのを感じた。なぜよりによつて何日か我慢できず、こんなに急いで彼女に本当のことを言わねばならなかつたのだろう。いま彼女はわかつたらう、彼女のこれからの全てはただ父親——娘の債権者——の烈日のような厳しさと周りの人間の氷雪をも凌ぐ冷眼でしかないことを。そのほかはすなわち虚しさである。虚しい重荷を負い、厳しさと冷眼の中をいわゆる人生の道をゆくのだ。それはどんなに恐ろしいことだろう。ましてこの道の果ては、又——墓碑さえもない墓にすぎない。

わたしは真実を子君に言うべきではなかつたのだ、わたしたちは愛し合つたことがあるのだから、わたしは永遠に彼女にわたしの嘘を捧げるべきであつたのだ。もし真実が尊いなら、それは子君にとつて重たい虚しさであつてよいはずはない。嘘も当然虚しい、しかし結局は、せいぜいがこれほどの重さでしかない。

わたしは真実を子君に言えば、彼女はなんの後腐れもなく、断乎として毅然と前に進むことができる、ひとえにわたしたちが同居した時のように、と思つた。だがこれはおそれくわたしが間違つていたのだろう。彼女のその頃の勇敢さと畏れを知らないことは愛のためであつたのだ。

わたしは虚偽の重荷を負う勇気がなく、真実という重荷を彼女に負わせてしまったのだ。彼女はわたしを愛したから、この重荷を負い、厳しさと冷眼の中をいわゆる人生の道を歩もうとした。

わたしは彼女の死を思った……。わたしは自分が卑怯者であり、強力な人々、真実の者であれ、虚偽の者であれ、によつて排斥されるべきであることを知った。しかし彼女は始めから終わりまで、わたしができるだけ長く生活を維持するようにと願っていたのだ……。

吉兆胡同を出ようと思ったのは、ここには異様な空ろさと寂寞があつたからだ。わたしは思った、ここを出さえすれば、子君がまだわたしの身辺にいるようで、少なくとも、まだ城内にいるようで、ある日、思いもかけずわたしを訪ねてくるかもしれない、会館にいた頃のように。

しかし一切の頼みと手紙には、一つとして反響がなかつた。わたしはやむを得ず、久しく無沙汰を重ねた先代からの付き合いを訪ねるしかなかつた。彼は伯父の幼なじみの同窓で、謹厳で名を挙げた跋扈生で、京住まいは長く、交友も広かつた。たぶん着物がぼろであつたせいだろう、訪問するや門番の白眼視にあつた。やつとのことで会うことができ、まだ覚えていてはくれたが、とても冷たかつた。わたしたちの往事を彼は全部知っていた。

“むろん、あんたもここには居れまい、”彼はわたしがどこ

かに仕事を見つけられるよう頼みにきたことを聞いた後、冷やかに言つた。“でもどこへ行く？ 難しいな。——あんたのあの、なんだつけ、あんたの友だちだろ、子君、あんたは知つとるか、彼女は死んだよ。”

わたしは驚きに言葉もなかつた。

“ほんとうですか？”つい思わず訊いた。

“は、むろんほんとうだ。我が家の王升の家は、彼女と同じ村だ。”

“でも、——どうして死んだんですか？”

“知るものか。要するに死んだのは確かだ。”

わたしはすでにどうして彼に別れを告げて、自分の住まいに帰つたのか覚えていない。彼が嘘をつくような人でないことは知つている、子君はもう来ることはない、去年のように。彼女は厳しさと冷眼の中を空虚という重荷を負いながらいわゆる人生の道を歩こうと思つたのだが、やはりダメだったのだ。彼女の運命は、すでにわたしが与えた真実——愛のない人間の間で死滅することに決つていたので。

もちろん、ここには居れなかつた。しかし、“どこへ行くか？”

周りは広大な空ろである、それに死の静寂がある。愛のない人々の眼の前で死ぬことの暗黒を、わたしは一々見るようだった、それにすべての苦悶と絶望の抗いの声が聞こえるようだった。

わたしはまだ期待していた、新しいものの到来を、無名の、

意外なもの。だが一日一日、死の静寂でないものはなかった。

以前に比べてあまり外出せず、ただ広大な空ろの中に坐臥して、この死の静寂がわたしの魂を食むに任せていた。死の静寂も時にはそれ自身震え、それ自身引きこもる、するとその継ぎ目に、無名の、意外な、新しい期待が閃くのである。

ある日の陰鬱な午前、太陽はまだ雲間から振り出ることはできず、空気さえも疲弊していた。ごそごそという足音とクンクンという鼻息を耳にして、わたしは目を見開いた。ざつと見渡したが、部屋はやはり空ろである。だがふと地面を見た。一匹の小さい動物が這いまわっていた、痩せ衰え、半死の、身体中埃まみれの……。

よく見て、わたしの心臓は止まり、続いて又跳ね上がった。それは阿随であった。帰ってきたのだ。

わたしが吉兆胡同を出たのは単に家主たちとその女中の冷眼のせいではなく、大半がこの阿随のためだった。しかし、*“どこへ行くのか？”* 生きるための新たな道は自ずとまだ多い、だいたい分かつてはおり、時に微かに見えて、すぐ目の前にあるように思えたが、まだそこに最初の一步をどう踏み込むかの方法がわからなかった。

何度もの思量と比較を重ねても、まだ受け入れてくれる場所はない。会館しかなかった。こんなぼろ部屋、こんな板のベツド、こんな半ば枯れた槐と藤の木はもとのままであったが、あのころわたしの希望、喜び、愛、生活であったものは、全部逝ってしまい、ただ虚しさ、わたしが真実と取り替えた虚

しさしか存在しなかった。

生きるための新たな道はまだ多い、わたしはそこに踏み込まねばならない。わたしはまだ生きているのだから。だがわたしはまだどのようにしてその最初の一步を踏み出したものかわからなかった。時に、その生きるための道が一条の灰色の蛇のように、自分からクネクネとわたしに向かつてかけてくるように思われた。わたしは待った、待って、近づいてくるのを見たが、忽然と暗黒の中に消えてしまった。

春先の夜は、やはり長い。長くぼつねんと坐っていると午前には街中で見た葬式を思い出した。前には紙の人形と紙の馬、後ろには歌を唱うが如き哭声。わたしは今にして彼らの賢さがわかった。これはなんとという軽やかなさっぱりした事だろう。しかし子君の葬式が又わたしの眼前に現れ、独り虚しい重荷を負って、灰色の長い道を前進する、しかし又たちまちに周囲の厳しさと冷眼のうちに消えてしまう。

わたしはほんとうに鬼魂なるもの、ほんとうに地獄なるものがあれと願う、ならば、たとい業風が吠え猛る中にさえ、わたしは子君を探し、面と向かつてわたしの悔恨と悲しみを述べ、彼女の許しを求めよう。でなければ、地獄の毒炎がわたしに纏付き、猛烈にわたしの悔恨と悲しみを焼き尽くせ。わたしは業風と毒炎の中で子君を掻き抱き、彼女の寛容を乞い、あるいは彼女を和ませよう……。

しかし、これは生きるための新たな道よりもさらに虚しい。いまあるものはただ春先の夜であって、やはりこんなにも長い。わたしは生きている、わたしはどうしても生きるための新たな道に向かって踏み出さねばならない、その第一歩は、——ほかならぬわたしの悔恨と悲しみを書き留めておくことだ、子君のために、自分のために。

わたしはやっぱり歌を唱うような哭声で、子君を葬送し、忘却の中に葬るしかない。

わたしは忘却しなければならぬ。わたし自身のために、そしてもう二度と、忘却でもつて子君を葬送したことを思い出してはならない。

わたしは生きるための新たな道に向かって第一歩を踏み出そう、わたしは真実を深く深く心の傷の中に埋め込み、黙々と前進しよう、忘却とうそをわたしの道案内として……。

一九二五年十月二十一日終わる。